

眩惑するアメリカ

——ヨシフ・ブロツキイの移住から同化まで——

竹内 恵子

1. 前史——ソ連時代

本稿では、20 世紀後半のロシアからの亡命詩人としては最大のビッグネームといえるブロツキイのアメリカ移住の経緯とその意義について検証してみたい。まずは本題に入る前に、彼の移住後の生活と比較対照するためにも、ブロツキイのソ連時代の経歴を簡単に振り返っておこう。

ヨシフ・アレクサンドロヴィチ・ブロツキイはソビエト連邦のレニングラード（現在はサンクトペテルブルグ）に、第二次世界大戦中の 1940 年、ユダヤ系の家庭に出生した。ブロツキイが 10 才となる 1950 年、スターリンの反ユダヤ政策により、父親が海軍博物館を解雇されてしまう。父親の軍服姿に憧れていた少年ブロツキイも 1954 年に「第 2 バルト海軍学校」を受験するものの、ユダヤ人であることを理由に不合格となる。¹ もともと共産主義教育になじめなかったブロツキイは、それまでもたびたび転校を繰り返し、7 年生の時には留年している（落第科目となったのは、「物理」「化学」「数学」、そして皮肉にも後年きわめて堪能になった「英語」だった）。² 1955 年、ブロツキイは 8 年生の時点で中等教育を完全に放棄し、工場や病院などで働くことになる。転機が訪れたのは 1957 年夏で、レニングラード大学の地質調査隊にアルバイトとして加わったところ、当時大学生の間で流行していた詩作に触れ、自分でも執筆を始めたことである。

しかし、1964 年 2 月に有益な職業に就かない「徒食者」の罪状により逮捕され、後にロシア文学史上において有名となる「不条理裁判」にかけられてしまう。³ その結果、ブロツキイは強制労働 5 年間の判決を受け、北部アルハンゲリリスク州の寒村へと流刑に処された。ただし、無実の詩人を裁くというこの「不条理」な判決は国内外の大きな批判を浴びたため、ブロツキイは翌 1965 年 9 月には釈放されて、レニングラードに帰還すること

* 本論文は、2008 年 12 月 13～14 日、名古屋市立大学において行われたシンポジウム「世界の移民・亡命文学の現況と可能性」での口頭発表を論文化したものである。

¹ Полухина В. Иосиф Бродский : жизнь, труды, эпоха. СПб., 2008. С.23.

² Там же.

³ 詳しくは、拙稿「ヨシフ・ブロツキイ逮捕の真相」『群』第 29 号、2006 年 12 月、2 頁。

ができた。しかし、その後も当局との軋轢は絶えず、一冊の詩集も出版することは叶わなかった。

更に、1972年5月10日、ブロツキイは突然、外国人ヴィザ登録課（ОВИР）から出頭を要請され、一ヶ月以内にイスラエルへ出国するよう強制される。⁴ ただ不幸中の幸いといふべきか、当日ブロツキイ宅に、偶然レニングラードに居合わせた米国ミシガン大学教員カール・プロッファーが来訪していたのである（彼らを引き合わせたのは、ナジェーダ・マンデリシュタムだという）。⁵ 6月4日ブロツキイはプルコヴォ国際空港より飛行機でウィーンへ出国し、プロッファーの出迎えを受けた後に、彼と共に英国詩人 W.H.オーデンの山荘へと赴いた（これは全くアポイントメントなしの訪問だったが、オーデンは快くブロツキイを半月ほど滞在させてくれただけではなく、アメリカ詩人アカデミー〈the Academy of American Poets〉より、千ドルを受領できるよう手配してくれたのだった）。⁶ その後、オーデンと共に渡英したブロツキイは、詩の国際フェスティヴァル（Poetry International）に参加してから、7月9日アメリカ合衆国デトロイトに到着した。

ここまでが、ブロツキイがソ連からアメリカへ移住するまでの大まかな経緯である。とにかく単身での亡命だった。1978年にやはり出国を強制された作家セルゲイ・ドヴラートフが母親同伴でアメリカへ渡ったこと（それ以前に、事実婚の妻と娘が移住を認められている）⁷ と比較すると、ブロツキイの場合はかなり過酷な処置をとられたと考えざるを得ないだろう。

2. アメリカ移住

前述したように、6月4日にブロツキイ宅に居合わせたカール・プロッファーの尽力によって、ブロツキイは幸運にも移住早々の1972年9月から、アナーバーにあるミシガン大学の客員詩人（Poet in Residence）という職を得ることができた。とはいえ、傍目には順調な亡命生活のスタートを切ったかに見えるブロツキイだったが、本人の心中は複雑だったようだ。当時の心境が如実に反映されている二連詩「五大湖地方にて（В озерном краю）」（1972年）⁸ という作品があるので、考察してみたい。

⁴ 詳しくは、拙論「越境する詩行——ブロツキイの詩『蝶』における亡命の軌跡」『SLAVISTIKA』（東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報）第18号、2002年、121-122頁。

⁵ S. Volkov, *Conversations with Joseph Brodsky* (NY: The Free Press, 1998), p.114.

⁶ J. Brodsky, "To Please a Shadow" in *Less Than One* (London: Penguin Books, 1987), pp.374-379.

⁷ セルゲイ・ドヴラートフ（沼野充義訳）『わが家の人々——ドヴラートフ家年代記』成文社、1997年、180-184頁。

⁸ ロシア語原題は直訳すると「湖水地方にて（英訳題名は「In the Lake District」）」であり、英国の湖水地方の自然を賛美する詩を書いた、いわゆる湖畔詩人ワーズワス等をも、ある程度念頭に置いているのかもしれない。

В ОЗЕРНОМ КРАЮ

В те времена в стране зубных врачей,
чьи дочери выписывают вещи
из Лондона, чьи стиснутые клещи
вздымают вверх на знамени ничей
Зуб Мудрости, я, прячущий во рту
развалины почище Парфенона,
шпион, лазутчик, пятая колонна
гнилой цивилизации – в быту
профессор красноречия, – я жил
в колледже возле главного из Пресных
Озер, куда из недорослей местных
был призван для вытягиванья жил.

Все то, что я писал в те времена,
сводилось неизбежно к многоточью.
Я падал, не расстегиваясь, на
постель свою. И ежели я ночью
отыскивал звезду на потолке,
она, согласно правилам сгоранья,
сбегала на подушку по щеке
быстрее, чем я загадывал желанье.

1972

Анн Арбор, Мичиган 〔Ⅲ, 25〕⁹

五大湖地方にて

その頃、歯医者たちの国で
(彼らの娘たちはロンドンから服を
取り寄せ、ぎゅっとしめつけるペンチは、

⁹ 本稿で使用するブロツキイのテキストの出典は、以下の作品集による。*Бродский И. Сочинения* Иосифа Бродского. СПб., 1998– (第7巻まで刊行中)。引用は、巻数をローマ字で、頁数をアラビア数字で示すものとする(例:〔Ⅱ, 12〕=第2巻12頁)。また特記しない限り、和訳は筆者による。

誰のものでもない「親知らず」を、旗のもとへと
高々とかかげている)、口中に
パルテノン神殿よりはましな廃墟のある私は、
スパイ、間諜なのだ、腐った文明の
第五列なのだ——日常生活では
雄弁術の教授なのだが——その私は、
淡水湖のうちの最大の湖のそばの
大学に住んでいた、地元のどら息子たちの
神経をくたくたにさせるよう、指令を与えられたのだ。

その頃、私が書いたものはみな
きまって「……」で終わってしまうのだった。
私は服も脱がずに、ベッドに
倒れこんだものだ。そして夜、
天井に星を探していると、
私が願いごとをするより早く、
星は燃焼の法則に従って
頬をつたって、枕へと流れ落ちていった。

1972 年

ミシガン州アナーバー

この詩は、あたかも過去の出来事を追憶するかのように、連の冒頭ごとに「その頃 (в те времена)」と書かれ、また動詞の過去形が頻用されているが、最後に「1972 年ミシガン州アナーバー」と付記されていることから、実際には執筆当時の「現在」、すなわちアメリカに移住したばかりのブロッキイの生活を描写したものである。詩の終景である「流れ星」が「涙」に変容してしまう形象は、いささか通俗的なものであるにしろ、亡命者の悲哀をセンチメンタルに表現したものであることは明瞭である。1 連目 4 行目にある「誰のものでもない (ничей)」という形容は、歯医者者の広告に描かれた匿名的な歯を示すと同時に、当時アメリカで歯の治療を受けていた**ブロッキイ自身の歯**をも指している。¹⁰ したがって、ブロッキイは自らを「誰でもない者 (никто)」と捉えていたことになる。要するに、この個所は、「誰でもない者」と称して巨人の難を逃れたオデュッセウスの故事を踏まえ

¹⁰ 移住直後、ブロッキイは実際にミシガンで歯科治療を受けている。Бродский: книга интервью. 3-е изд. М., 2005. С.69–70.

ており、ブロツキイは亡命者となった自分自身をオデュッセウスに擬えているのである。

また 1 連目 7～9 行目で、自分は大学教授になりすましたソ連のスパイだと述べている個所は、あくまで皮肉めいた冗談である。しかし、アメリカという異国では、ブロツキイのようにソ連本国でむしろ迫害された立場にあった人間ですら、ソ連出身というだけで「スパイ」と疑われてもおかしくない時代だったのだ。「スパイ」は極端だとしても、異郷において「他者」として扱われ、¹¹ 強烈な孤独感を抱いたために、詩人は現在において生起している事柄をあえて「過去」のものとして捉え直すという手法によって、現実を突き放して客観視する必要にかられたのだといえる。

3. 「約束の地」としてのアメリカ

3.1. 「巡礼」の道行き

亡命当初、「他者」と見なされていた異邦人ブロツキイの心境が、その後どう変化していったか。それを考察するための手がかりとして、移住から 3 年後に執筆された長編詩「ケープ・コッドの子守歌 (Колыбельная Трескового мыса)」(1975 年)を取り上げたい。この詩で特筆すべきことは、「ケープ・コッド」という土地が舞台であることだ。コッド岬とはマサチューセッツ州東端の観光地のことだが、この地は 1620 年、メイフラワー号に乗ってイギリスから渡って来た清教徒たち、いわゆる巡礼始祖 (Pilgrim Fathers) が最初に上陸した地点として知られている。実は、この巡礼 (pilgrim) という概念自体、ブロツキイの詩学において重要な項目の一つであり、1958 年 (ブロツキイ 18 才) という最も初期の時代に、「巡礼者たち (Пилигримы)」という作品を書いている。詩人は、中期の代表作「ケープ・コッドの子守歌」を執筆するにあたって、この「巡礼者たち」を念頭に置いていると思われるので、まずはそちらを一部引用しておきたい。

Мимо ристалищ, капищ,
мимо храмов и баров,
мимо шикарных кладбищ,
мимо больших базаров,
мира и горя мимо,
мимо Мекки и Рима,

¹¹ 余談だが、ブロツキイのような政治的亡命者であっても、アメリカで生活していくにあたっては (おそらく就職や市民権獲得の判断基準として)、英語力テスト (いわゆる TOEFL) を受験しなくてはならなかった。Аллой Р. Веселый спутник: воспоминания об Иосифе Бродском. СПб., 2008. С. 44.

синим солнцем палимы

идут по земле пилигримы. [後略] [I, 21]

競技場、寺院を通り過ぎ

神殿と酒場を通り過ぎ

立派な墓地を通り過ぎ

巨大な市場を通り過ぎ

世界と悲哀を通り過ぎ

メッカとローマを通り過ぎ

青い太陽に灼かれつつ

巡礼者たちは大地を行く。[後略]

この初期詩篇と呼応するかのように、「ケーブ・コッドの子守歌」第XII章（最終章）では、「巡礼」の形象が主軸をなしている。

Дверь скрипит. На пороге стоит треска.

Просит пить, естественно, ради Бога.

Не отпустишь прохожего без куска.

И дорогу покажешь ему. Дорога

извивается. Рыба уходит прочь. [後略] [III, 90~91]

戸がきしむ。戸口に立っているのは、一尾の鱈。

鱈は飲みものを乞う、もちろん神の名によって。

旅人に、パンの一切れも持たせてやらないわけにはいかない。

そして道を教えてやることになる。曲がり

くねった道だ。魚は立ち去っていく。[後略]

ここでは、アメリカ建国の礎を築いた「巡礼始祖」を土台としたイメージに、よりキリスト教的な色彩が添えられている。第一に、コッド (cod) という音に神 (God) という語が響き合っている。第二に、コッドとは「鱈」のことだが、「鱈」を指すロシア語の「треска」は、明らかに「十字架 (крест)」のアナグラムである。したがって、この「鱈」の巡礼という発想は、東から西へと開拓を進行させたアメリカ建国の歴史をなぞったものであると同時に、天国というユートピアを目指す、「約束された地」への道行きの情景がかなり強調されたものだといえる。この点において、ソ連という全体主義体制の中で創作活動への圧迫を受けていたプロツキイが、その桎梏から解放されて、「自由の国」アメ

リカに一種のユートピア的なものを見出していく、その心理的プロセスが反映されているといっても過言ではないだろう。

3.2 「鏡像反転」する〈帝国〉

ブロツキイにとってのアメリカは、ソ連を脱出して辿り着いた「約束の地」であると共に、新たな〈帝国〉でもあった。長編詩「ケープ・コッドの子守歌」においては、アメリカはソ連と同様に、20世紀の超大国として〈帝国〉と捉えられており、ソ連からアメリカへの移住という体験が「帝国を替えること（перемена империи）」にすぎないと表現されているからだ。ここで、この詩の第IV章3～5連目を挙げてみよう。

[前略]

еремена империи связана с взглядом за
море (затем что внутри нас рыба
дремлет), с фактом, что ваш пробор,
как при взгляде в упор

в зеркало, влево сместился...

[中略]

И здесь перо
рвется поведать про
сходство. Ибо у вас в руках
то же перо, что и прежде. В рощах
те же растения. 〔Ⅲ, 84〕

[前略]

帝国を替えることは、海の向こうへと
視線を送ること（というのも、我々の内では
魚がまどろんでいるので）とも、結びついている。
鏡をまっすぐ見つめると、右につけたはずの髪の毛の分け目が

左へと位置が変わってしまったという事実とも…。

[中略]

ここで、ペンは
何もかもが似通っているということを知らせようと

躍起になる。なぜなら手の中にあるのは
以前と同じペンだから。林の中には
同じ植物。

亡命したブロツキイは、一見すると対極にあるように思われる社会主義国家ソ連と資本主義国家アメリカが、構造的には共に同じような〈帝国〉にすぎないことを、早々に看破しているのである。¹² ただ、あえて指摘しておきたいのは、これら二つの国は確かに「何もかもが似通っている」ようでいて、「鏡をまっすぐ見つめると、右につけたはずの髪の毛の分け目が左へと位置が変わってしまった」とあるように、「鏡像反転」、すなわち左右が逆転しているということである。このように、ブロツキイは同じような〈帝国〉にいらながら、ソ連時代におけるマイナス面（①当局からの迫害、②ユダヤ系であること）が、アメリカにおいては逆にプラスに作用していくのだが、次にそのことを検証してみたい。

4. 眩惑するアメリカ

前述したように、ブロツキイはアメリカで当初「他者」として扱われるという経験をしたが、その後、いわばアメリカに「約束の地」という意義を見出すまでに至った。換言すれば、ブロツキイは故国ソ連よりもアメリカに魅力を感じるようになったのである。その心境を如実に表しているのが、次に挙げる、バレエダンサーのミハイル・バリシニコフ¹³ に捧げた、「クラシックバレエは美の宮殿であり…（«Классический балет есть замок красоты…»）」（1976年）で始まる詩の、6～7連である。

Как славно ввечеру, вдали Всяя Руси,
Барышникова зреть. Талант его не стерся !
Усилие ноги и судорога торса
с вращением вокруг собственной оси

рождают тот полет, которого душа
как в девках заждалась, готовая озлиться !

А что насчет того, где выйдет приземлиться,

¹² 詳しくは、拙論「ブロツキイの〈帝国〉論——詩『ANNO DOMINI』における父性原理を中心に——」『SLAVISTIKA』第23号、2007年、135-155頁を参照されたい。

¹³ バリシニコフは、1948年ソ連のリガに生まれ、1974年アメリカへ亡命した。なお、ブロツキイは元来バレエに関心がなかったが、亡命してきたバリシニコフと親しく交際し（ソ連時代には交流がなかった）、その友情はブロツキイが逝去するまで続いた。

земля везде тверда; рекомендую США. [III, 114]

晩に、ロシア全土からはるか離れて、バリシニコフを見るのは
なんと素晴らしいことか。彼の才能はすり減ってはいない。
力のこもった足と痙攣する胸が、
自分を軸とした回転とともに

あの飛翔を生み出すのだ。魂がいまにも怒り狂いそうになって
売れ残った花嫁のように待ち望んでいたあの飛翔を！
それがどこに着地するかと言えば
地面はどこでも固い。アメリカ合衆国をぼくは勧める」(沼野充義訳)¹⁴

このように、2年遅れて亡命してきたばかりのバリシニコフに、ブロツキイは先輩として、アメリカ移住を勧告しているのだ。他に、この詩で注目すべき点は、バレエ大国であるロシア（バレエ界を刷新したことで有名な「バレエ・リュス (Ballet Russe=ロシアのバレエ)」というバレエ団も存在したくらいである)、すなわち「バレエ→ロシア」という通常のイメージ連鎖を否定して、あえて「ロシア全土からはるか離れて」という意表をつく一節を加えている点と、「地面はどこでも固い」という表現に、「陸地」を指すラテン語「terra firma」との語呂合わせを含ませている点だろう。

ちなみに、バリシニコフは『ホワイトナイツ／白夜 (White Nights)』（1985年）と題された映画で、レニングラードとおぼしき都市で迫害されていたバレエダンサーがアメリカへ亡命して自由な舞踊表現を手に入れるというストーリーの、主役を演じている。要するに、バリシニコフにしてもブロツキイにしても、共産主義国で圧迫されていた芸術家がアメリカに移住することによって、自由な表現活動を行えるようになったという「大きな物語」の中に組み込まれ、良くも悪くもその「広告塔」のような存在に堕してしまいかねない危険性があるといえる。

ただ特筆すべきことは、ソ連時代のブロツキイがいわゆる「反体制派」の詩人であったことは一度もないということだ（例えば、共産党政権や当局を直接批判するような作品は全く書いていない）。ブロツキイの言によれば、彼は少年期に「親ソ連的 (просоветский)」でも「反ソ連的 (антисоветский)」でもなく、「非ソ連的 (асоветский)」な人間になることを目指そうと決心したということである。¹⁵ 彼の作品は、人間存在の不条理さや、空間や時間といった形而上的な内容をテーマとするもので、いわばソ連体制とは「そぐわない」

¹⁴ 沼野充義『徹夜の魂——亡命文学論』作品社、2002年、218-219頁。

¹⁵ Бродский: книга интервью. С.442.

ものだった。詩の内容はあくまで哲学的、思弁的、そして個人的なものだったのだ。その意味では、ソ連時代のブロツキイはいかなる組織にも属さず、個人的な内容の詩篇を書き綴っていたという点で、まさしく「私人」だったといえることができる。その彼がむしろアメリカに渡ってから、「私人」の枠に収まりきらず、「公人」へと変質していったと言えるのではないか。それを検証するために、アメリカでブロツキイがどのようにキャリアを築いていったかを、振り返っておきたい。

アメリカにおけるブロツキイの主な経歴¹⁶

1974 年秋：マサチューセッツ州の 5 大学（Smith College, Mount Holyoke College, Amherst College, Hampshire College, the University of Massachusetts）の客員教授となる。（1980 年、常任に昇格する）。

1976 年 11 月：グッゲンハイム財団より奨励金を受ける。

1977 年 10 月 11 日：アメリカ国籍を取得する。

1979 年 5 月：アメリカン・アカデミー（American Academy and Institute of Arts and Letters）のメンバーになる（ただし、1987 年、ソ連の詩人エヴゲーニイ・エフトゥシェンコの入会に抗議して退会する）。

1981 年秋：マッカーサー財団より「天才賞（Award for works of genius）」を授与される。

1987 年 1 月：エッセイ集『レス・ザン・ワン』が、全米批評家協会賞（The National Book Critics Circle's Award）を受賞する。

同年 12 月：ノーベル文学賞を受賞する。

1991 年 9 月～1992 年 6 月：アメリカ合衆国桂冠詩人（5 代目）のポストに就任し、ワシントンの議会図書館にオフィスを構える。

最も注目すべきことはやはり、ブロツキイが 47 才という異例の若さでノーベル文学賞を受賞したことだろう。勿論ブロツキイの詩的才能が正当に評価された結果だとはいえ、当時のソ連におけるペレストロイカの時期と重複していることは否定できない。更に 1991 年、彼はアメリカ合衆国桂冠詩人（外国生まれの詩人としては初）に就任し、ワシントンにオフィスを与えられている。壮年のブロツキイはノーベル賞受賞歴のある大学教授であり、またワシントンという権力の中枢にオフィスを構えるまでに至ったのだから、これは明らかに一介の「私人」という存在を超える大物になったといえるだろう。

ちなみに、ブロツキイの代表的なエッセイは「レス・ザン・ワン（Less Than One）」と

¹⁶ 年表作成には、次の文献を参考にした。Лосев Л. Иосиф Бродский: опыт литературной биографии. М., 2006. С.363–403.

いう題名を冠したもののだが、これはソ連という全体主義（常に複数の「われら」が尊重される）体制の中であって個人（one）を貫いたという、自負の意味合いだけに限定されるものではない。エッセイ本文が実質的に「failure（失敗、落第）」という単語で始まることから、ソ連社会における「落伍者」（ソ連の成績評価は5段階システムで、5が「優」であり、2以下は落第する。「レス・ザン・ワン（1以下）」には、「最低の落ちこぼれ」という含意がある）だった自分自身を、皮肉った表現でもあるのだ（そして今やアメリカでは、ブロツキイの方が「教授」として学生たちに成績をつける身分に昇格しているのである）。

しかし、このようにソ連で優等生ではなく「落伍者」だったからこそ、亡命先のアメリカでは、全体主義に抵抗した者としてプラスに受け取られたとも考えられよう。それに加えて、ブロツキイは主にニューヨークを活動の拠点とし、ユダヤ系の出版業者や知識人と交流を深めていたために、¹⁷ スムーズに執筆活動を行うこともできた。ソ連という国においてユダヤ人であるということは非常にデリケートな問題だが、ニューヨークのインテリ層においてユダヤ系であるということは、逆にきわめてプラスに作用する。

要点をまとめると、ブロツキイにとってソ連時代にマイナスとなっていた2つの点、すなわち当局に迫害されていたこと、ユダヤ人であることが、左右逆転に「鏡像反転」した〈帝国〉のアメリカでは、それらが二つともプラス事項に反転して、それにより彼は予想以上の成功を掴むことができたとも言えなくはないということだ。また、ブロツキイ自身レーガン政権を強く支持していたばかりか、¹⁸ 最晩年の1995年4月には、アトランタ・オリンピックを盛り上げるためのノーベル文学者受賞者シンポジウム¹⁹にも駆り出されている。仮にブロツキイが亡命せずにソ連に残っていて、²⁰ 例えばモスクワ・オリンピックを後押しするようなイベントに協力したかどうかを想像するなら、とてもそのようなことは有り得なかったに違いない。このように、ソ連時代は政治に無関心だったブロツキイが

¹⁷ ブロツキイと特に親交が厚かったのは、アレクス・リーバーマン（キエフ出身の東欧系ユダヤ人で、雑誌『Vogue』『Vanity Fair』の出版主。妻タチヤナ・ヤーコヴレヴァは、パリ時代の詩人マヤコフスキイの恋人だった女性）、ロジャー・ストロース（グッゲンハイム一族の出身で、ブロツキイの英訳詩集の出版を一手に引き受けていた、Farrar, Straus&Giroux社の創立者）、評論家スーザン・ソング等である。

¹⁸ Бродский: книга интервью. С.301.

¹⁹ 「An Olympic Gathering」という催しで、ブロツキイの他には大江健三郎、トニ・モリスン、ウォーレ・ショインカ等が参加した。なお、大江はその時のブロツキイの印象について、スーザン・ソングとの往復書簡において軽く言及している。大江健三郎『暴力に逆らって書く』朝日文庫、2006年、150-166頁。

²⁰ ちなみに、ブロツキイは亡命後、一度も帰国することはなかった。ペテルブルグでは、ブロツキイが「極秘裏に」帰郷しているというデマが流れたこともある。Синдаловский Н. Групповой портрет в фольклоре Санкт-Петербурга. М., 2008. С.100-101.

アメリカで変質したのは、単に高い社会的地位を得ただけではなく、自分をもはや「他者」ではなく、「真正のアメリカ国民」として認知してもらいたいという心理的操作（前述したように、彼は1977年に米国籍を得た）が働いたためだと考えられる。

5. ブロツキイの限界

以上のように、アメリカで華々しく成功したブロツキイは、結局のところどこに辿り着いたのか。確かにアメリカという自由主義国家だからこそ、ブロツキイは個人的成功を収めたものの、皮肉にもアメリカという国だからこそ、彼は最終的にある意味で限界に行き当たったのではないか。本稿の最後に、この点について私見を披瀝したい。

先述したように、1991年にブロツキイはアメリカ合衆国桂冠詩人というポストに就任する。²¹ 彼は就任にあたって、「控えめではない提案 (An Immodest Proposal)」と題する講演（18世紀、アイルランドの貧困改善を訴えたジョナサン・スウィフトのパンフレット「控えめな提案 (A Modest Proposal)」をもじったもの）を行い、アメリカは物質的には豊かだが、文学的教養に乏しいから、その文学的貧困を解消しようと訴えかけた。そして実際に「Poetry in Motion」²² という運動を起こし、ニューヨークの公共交通機関であるバスと地下鉄に詩のポスター（ブロツキイを含めたロシア詩人たちの英訳作品の他に、ダンテ、イエーツ、ホイットマン等の古典作品からの一節など）を掲示したり、スーパーマーケットで詩集を販売するよう業界団体に強く働きかけたりしたが、反響は限定的なものに過ぎず、特にワシントンでの反応は冷淡なものだった。友人でもある詩人アンソニー・ヘクトに言わせれば、「ワシントンの社会は法律家で構成されているが、法律家は詩に興味を持たない」²³ ということだが、まさに当時のブロツキイの鬱屈を反映した1992年の詩「ブルース (Blues)」という英語詩があるので、第1～2連を引用しておきたい。

Eighteen years I've spent in Manhattan.
The landlord was good, but he turned bad.
A scumbag, actually. Man, I hate him.
Money is green, but it flows like blood.

I guess I've got to move across the river.

²¹ このポストは1985年に制定され、ブロツキイで5代目となる（前任者には、マーク・ストランド、リチャード・ウィルバー等がいる）。Вайль П. Стихи рядом с молоком и аспирином // Иосиф Бродский: Труды и дни / Под ред. Лосев Л. и Вайль П. М., 1998. С.67.

²² Там же. С.78.

²³ Там же. С.69.

New Jersey beckons with its sulphur glow.

Say, numbered years are a lesser evil.

Money is green, but it doesn't grow.²⁴

十八年の歳月をマンハッタンで過ごし

いい人だった家主も悪くなった

じっさい、ひでえ野郎さ、うんざりだね

お金は緑、でも血みたいに流れていく

どうやら川を越えて行かなくちゃならない

硫黄色の灯でおれを招くはニュージャージー

まあ、数えられる歳月なら最悪とは言えないか

お金は緑、でも木になりはしない（沼野充義訳）²⁵

この詩は、迫り来る死というものを切実に意識しているといえる。なぜなら、第一に「数えられる歳月」と明言しているだけでなく、「川を越えて」（現実レベルではハドソン川を指しているが、同時に、古代ギリシアより続く「冥府へ渡る川」の形象も踏まえていよう）と表現していること、また「硫黄の（sulfurous）」という形容がしばしば「地獄の劫火」を意味することなどから、それが窺い知れる（実際に、1960年代から重い心臓病を患っていたプロツキイは、1996年1月に心臓発作により急逝した）。またこの詩は、当初から英語で書かれた（すなわちロシア語原文を英訳したものではない）意欲的な作品だが、プロツキイの没後、オックスフォード大学教授 Craig Raine によって、第1連1行目の「Manhattan」と3行目の「Man, I hate him」の押韻が母音の発音上不正確であるとして批判された、いわくつきの詩でもある。²⁶ いずれにせよ、この詩において何が詩人を「ブルー」にさせているのかといえ、それは「お金」の問題であり、やはりアメリカはマネー至上主義社会だということの再認識であるといえよう。

要するに、プロツキイは①ソ連社会での不遇、②ユダヤ系という2点を活用することで西側で個人的成功を収め、いわば「アメリカン・ドリーム」の体現者となったが、その反面、詩文芸を最高芸術と見なし尊重する（それだけに詩人という存在は畏怖され、迫害されることもある）ロシアとは異なり、拝金主義的な風潮のあるアメリカでは、そもそも詩に関心が寄せられないというアイロニカルな限界に突き当たったのである。その背後には、

²⁴ J. Brodsky, *Collected Poems in English* (NY: Farrar, Straus and Giroux, 2000), p.448.

²⁵ 『すばる』集英社、1997年11月号、234頁。

²⁶ Кюст Й. Плохой поэт Иосиф Бродский // Новое литературное обозрение. 2000. №45. С.253.

これはきわめてロシア的な発想でもあるのだが、文学者が社会的影響力を持つというプロツキイの誤解があると思われる。プロツキイといえば、易々と英語を習得し、アメリカ生活にも違和感なく溶け込んでいったという現実がある一方で、「文学」に関してはあくまでも「ロシア的」な残滓を保ち続けていたのではないだろうか。その詳しい解明は今後の研究に譲るとして、本稿はここで擱筆することとしたい。

«Очаровательная» Америка : заметки об эмиграции Иосифа Бродского

ТАКЭУТИ Кэйко

В настоящей статье рассматриваются обстоятельства жизни в США поэта Иосифа Бродского.

Как известно, в 1972 году советские власти вынудили Бродского эмигрировать из СССР. Сразу после отъезда поэт получил должность «Poet in Residence» в Мичиганском университете. Тогда он описал свое тяжелое состояние в стихотворении «В озерном краю». Впрочем, по мере того как Бродский привыкал к американской жизни, он стал считать США «страной обетованной».

Потом Бродскому, как и артисту балета Михаилу Барышникову, пришлось играть символическую роль человека, завоевавшего свободу художественной деятельности путем бегства из тоталитарного государства. Бродский получил Нобелевскую премию в области литературы за 1987 год, а в 1991 году стал поэтом-лауреатом Соединенных Штатов.

Таким образом, Бродский сумел воплотить в себе «американскую мечту». Однако, несмотря на блестящую карьеру, нельзя сказать, что его успех был неограниченным. Потому что в Америке, где распространено корыстолюбие, мало кто обращает внимание на поэзию. По всей вероятности, Бродский имел неправильное представление об американском обществе. Ему казалось, будто там поэт может оказывать такое же огромное влияние на публику, как в России, где оценивают художественную литературу чрезвычайно высоко.